いれずみ物語 —23—

小野 友道

絵身いれずみ
— その極みは Mimi-nashi Hōichi —

白川 静は文身には、瘢痕いれずみ、針で刺すいれずみ（入墨・黥涅（げいでつ））、そして一時的に文様を描き加える絵身（かいしん）の３つがあるとした。東南アジアなどで流行っているヘナによるものが絵身いれずみの代表といえよう。

文身の定義を白川は、「何らかの儀礼的な目的をもって加えられる身体装飾という」としている。「そして屍体を聖化するには、もとより絵身の方法がとられたであろう。それは鮮やかな朱色をもって、その胸部に加えられたものと思われる。……文身として心という形が胸にしるされ……」と述べている。文身は屍体などに書かれた文字そのものであるというのである。

さすれば、ラフカディオ・ハーンの“The story of Mimi-nashi Hōichi”はどうだ。平家の亡霊に呼び出され、安徳帝の御陵の前で、壇ノ浦の合戦のくだりを琵琶を奏でながら語ったあの Hōichi である。平家の亡霊の仕業に危険を感じた阿弥陀寺の住職が、救いの手段として Hōichi の全身に書いた般若心経は、原義的な意味においても文身といえないか。

＊

ハーンのその文章を読んでみよう。

「Before sundown the priest and his acolyte strippted Hōichi. Then, with their writing-brushes, they traced upon his breast and back, head and face and neck, limbs and hands and feet—even upon the soles of his feet, and upon all parts of his body—the text of the holy sutra called *Hannya Shin-kyo*.

そして、寺の縁側に僧に言われたとおりに黙って動くことなく座した Hōichi、やがて Hōichi, Hōichi と呼ぶ声が聞え、足音が近づいて来た。

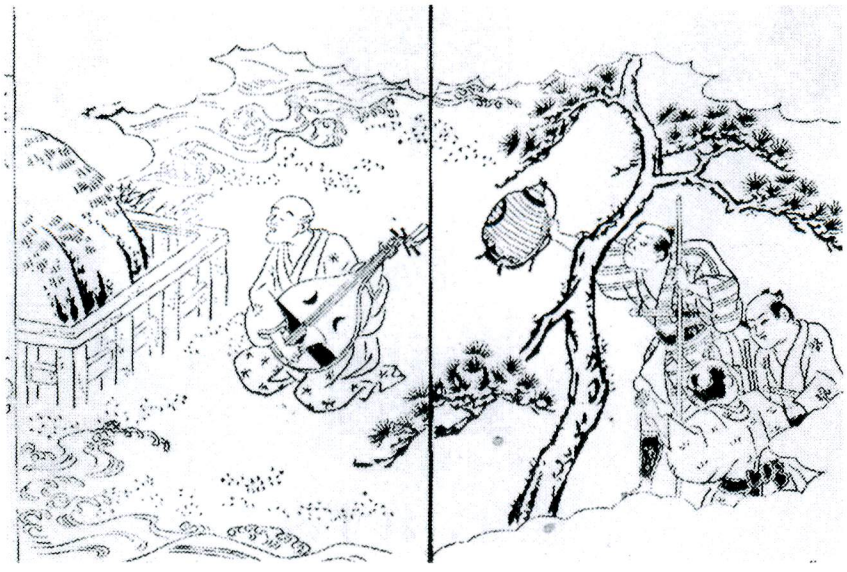
“At last the gruff voice muttered close to him：“Here is the biwa；but of the biwa-player I see only two ears! So that explains why he did not answer：その後、耳を引きちぎられることになる Hōichi が在った。

夜が明けて、僧は“Poor, poor Hōichi!” the priest exclaimed. “All my fault—my very grievous fault! Everywhere upon your body the holy texts had been written—except upon your ears! I trustd my acolyte to do that part of the work；and it was very, very wrong of me not to have made sure that he had done it!……」

それで耳なし芳一と相成ったのである。

＊

平家にまつわるこのような話は古くから知られており、『曾呂利物語』（寛文３年）に、「耳



『臥遊奇談』第2巻　ヘルン文庫　富山大学附属図書館所蔵

切れうん市が事」がある。座頭うん市が比丘尼けいじゅんの亡霊に取りつかれた。それで全身に尊勝陀羅尼を書いてもらった。それは仏頂尊勝の功徳を説く陀羅尼で霊験あらたかなことで知られ、密教や禅宗で読誦された。しかし、うん市の場合も耳に書き漏らした個所があり、怨霊にその耳を引きちぎられる話である。また、『宿直草』（延宝５年）にある「小宰相の局幽霊の事」もそうである。赤間関の平家の墓がある寺で、『平家物語』の「小宰相の局」の段を語った座頭の団都（だんいち）の話である。やはり寺の住持に般若心経をかいてもらうが、左耳を書き忘れられ、「耳切れ団都」と呼ばれる。

しかし、直接的にハーンの“The story of Mimi-nashi Hōichi”の原拠になったのは、江戸時代の『臥遊奇談』だといわれている。これは、富山大学附属図書館の「ヘルン文庫」のなかの和本の一冊で、ハーンの耳に確かに、節子夫人の声によってそれは届いたはずである。その中の、「琵琶秘曲泣幽霊（びわのひきょくゆうれいをなかしむ）」を荒木 尚の翻刻で紹介する。

「長州赤間関ハ古源平戦争の地にして、千載の遺恨をとゞむ。幽魂長く消する事能ハず。……後世にいたって一宇を建立し、幽霊を慰する。其名を阿弥陀寺と名づく。……爰に阿弥陀寺の近辺に瞽者（こしゃ）（めしゐ）あり。芳一といふ。幼少より琵琶に習熟して長ずるに随ひ其妙極む。……其頃世に称じて芳一が平家をかたるや人をして感泣せしめ、鬼神を動かすとぞもてはやしける」

そしてハーンが記したとほぼ同じ物語が展開する。

「和尚大に驚き、是必定幽魂汝が名曲を賞じすかして弾せしむる成べし。汝連夜彼地に至らは、恐らくハ陽気陰気に圧されて命を害する及べし。芳一これを聞て色青さめ後悔す。和尚良久しく計較して、＜うれふることなかれ。これをまぬかる一計あり。汝宜く我言を用ゆべし。背かバ命を落すならん＞と芳一を裸体にして、和尚自筆をとり又衆僧にも命じ、芳一が明所なく般若心経を書せしむ」

この物語、其の後の展開もまったくハーンのそれと同じで、命取りとめた芳一のその「琵琶ハ尚なお妙をきハめて、世に＜耳切れ芳一が琵琶＞と称じけりとぞ」で終わっている。

＊

かように亡霊・怨霊などに対して陀羅尼などを唱えると同様に、身体にそれを書き込むことが、昔からなされていたのであろう。これはま

さに白川の言うところの「文身」である。色道大鏡にある中間や馬追船子が、自発的に題目七字すなわち南無妙法連華経、六字の名号南無阿弥陀仏、あるいは三十六返の念珠を肩先に印しているものや、「延宝天和の頃鐘弥左衛門という侠客が居て、背に肩の処から横筋かひに、南無阿弥陀仏と六字の名号を、大文字に彫って居た。……初め神田川から吉原通ひの客を、山谷へ送る船頭であったが或時船の中に寝て客を待って居る折、ふと川面を見ると今迄満ちて居た潮が、いつの間にか引いてしまって居た。そこで翻然と悟り人の一生も亦、この潮の満干の様なものだ。若いと思ってゐる中に、間もなく年老いてしまふ。こりゃ愚図愚図して居られない。……世の為につくさうと誓った。その命を棄ててと云ふ気持ちが、背中の南無阿弥陀仏と云ふ文身となって」と、玉林が記した例などは、信念あるいは護符的なニュアンスがうかがわれる。

これらはもちろん彫ったいれずみであるが、何やらHōichiのそれに似ているではないか。日本にかなり特有ないれずみの動機のようであるが、例えば、山本芳美の『イレズミの世界』のカバー写真は小林紀晴の撮影によるもので、バンコクで清掃員をつとめる50代の男性のもので、身を守る経文が彫り込んであるという。

ご存じのように、タイ国も仏教の国である。もっとも文字ばかりでなく、絵のいれずみの図柄も護符的願いが込められているものが少なくないのは周知の通りであるが。

*

ところで、西 成彦は「盲者と文芸／ハーンからアルトーへ」の中で、「魔除けの般若心経を全身にかきこまれた琵琶法師の裸形と、その裸形を見ることができず、ただまっさらな両耳だけが宙に浮いているかのような幻視に惑わされるサムライの視覚まで描きこんだその語り口は、ハーンの独創というよりは「怪談」という語り形式の中から生み出された独特の話術をハーンが誠実に踏襲した結果」であるとし、アントナン・アルトーが、「書でおおわれると、芳一は黒いレースの衣を着たように見えた」と記したことに、西は「ただ文字を皮膚に書き込んだものではない。皮膚をなぞる筆が薄皮で蔽うようにしてむきだしの芳一の全身に衣をかけるのだ。僧侶は蜘蛛が蜘蛛の巣をはるように筆をあやつり、盲目の琵琶法師は、般若心経という闇を衣のように身に纏う」と述べて、「アルトーが視覚性を晴眼者に固有なものとしてわりふることをやめ、むしろ盲者の過剰なる視覚性を強調する方向へ＜耳なし芳一＞を押し出した」と指摘した。衣をかけて般若心経の闇を纏うことは、それはまさに宗教的な儀式であり「文身」にほかならない。

上海に大きなスタジオを構え、その彫刻作品が世界中から注目されている作家ジャン・ホォン（Ziang Huan）が、2007年秋、ニューヨークのアジア・ソサエティ美術館での個展で、その鋭い眼光と坊主頭の自分の顔に「＜耳なし芳一＞のごとく顔を文字が埋め尽くす《家系図》（このあと顔が真っ黒になるまで字が上書きされる）作品」（「芸術新潮」58；127，2007.）が人気を呼んだらしい。その写真が同誌に掲載されている。なるほど唇にまで漢字が見えるが、彼の耳には、左耳たぶのごく一部以外にまだ文字はない。まさに耳なし芳一である。

やはりこのパフォーマンスも魔よけの意図があったのか。芸術新潮のその同じページのもう一つの彼の作品が、大きな銅製の「剥がれ落ちたての仏陀の手」であるのが、なんとなく示唆的である。まさか彼がハーンの“The story of Mimi-nashi Hōichi”を知っていたことはないと思うのだが。

（熊本保健科学大学・学長）

文献

荒木 尚：怪談 ― 日本の古典文学とのかかわりから ―，『熊本大学放送公開講座　ラフカディオ・ハーンと熊本』，熊本大学学生部，1992．p235.
江馬 務：『時代風俗綜覧』，政経書院，1935.
白川 静：『中国古代の文化』，講談社，1979.
玉林晴朗：『文身百姿』，日本刺青研究所，1987.
西 成彦：盲者と文芸／ハーンからアルトーへ，国文学，49（11）；44，2004.
山本芳美：『イレズミの世界』，河出書房新社，2005.
ラフカディオ・ハーン：『怪談 Kwaidan』，講談社インターナショナル，1994.